『まんじ』152 号(2019.05)

ストリートビュー紀行

新井　宏

一度覚えたメロディーは絶対に忘れることがない。何の曲か分からなくとも、かすかに聴いただけで、うろ覚えながら歌詞までフォローできる。忘却の彼方に埋もれていた脳細胞が、出番を得たとばかりに活き活きと働きだし、それが「快感」となる。

画像もそうだ。潜在意識下にあった風景が、何かに触発されると鮮やかに浮かんでくる。どこで見たのであろうか。それが幼い頃の記憶につながる。懐かしのメロディーだ。

実は、三戸岡道夫さんの「過去の町」を読んで、びっくりするほど情景が鮮明に浮かんできた。文章力によるところが大きいとしても、他人の経験でさえ、これだけ脳細胞を刺激する。そうだ、「旅」に出よう。

昭和十九年春、国民学校二年生になる時、父の二度目の出征で、東京馬込から、父母の郷里、新潟県古志郡（現長岡市）高島村と十日町村に四年間ほど疎開した。ちょっと歩き回れば何か書けるに違いない。

しかし、体調を崩した妻のこともあり、のんびりというわけにも行かない。

それでは少し調べてみよう。

今年の大河ドラマに「河井継之助」がノミネートされていたと聞くが、戊辰戦争の行われたのが長岡市と小千谷市の中間地帯、疎開地の十日町村の近辺である。父の残していった『岡南の郷土誌』（昭和六十年、総八七一頁）を引っ張りだす。『岡南』とは長岡市の南方を言うらしいが、それはまさに古志郡であり、その中には、高島小学校、十日町小学校、六日町小学校、山谷沢小学校の四校があった。その内の二校に疎開したのであるから、お誂え向きの詳細な「郷土誌」である。

それにしても現場をまず見たい。ああ、そうだ。グーグルのストリートビューを使えば良い。

暇な時に、世界の観光地を選んで、ストリートビュー

で歩き回って楽しんでいる。観光地は実に詳細なストリートビューを載せている。道筋に沿って、まっすぐ、あるいはくねくねと進むだけでも、自転車のスピード感覚で左右を観察できる。立ち止まって三百六十度を見まわすことも出来る。名所では、建物の内部まで進むことさえサービスしてくれる。

まずストリートビューで、最初に疎開した母方の里、高島小学校の前に立つ。

昭和三十九年に十日町小学校に併合され、今は何もの残っていない。しかし『岡南』を見ると高島小学校の全景が航空写真として載っている。二階建ての小さな小学校であった。複式授業で、それぞれ十数名の一年生と二年生が一緒に学んだ。おしゃまな一年生の女の子が、調子を付けて教科書をすらすら読むのに、二年生にもなって一文字ずつ拾い読みしている状態で恥ずかしかったことを覚えている。

いまはどうやら農協の支所か倉庫になっているようである。小さな校庭は公園になっていて、隣地も樹木が茂っているので公園の続きらしい。小学校の斜め前には、確か先生が住んでいた宿舎があった。おばさん先生だったと思うが、名前も覚えていない。

そこで一年間学んでから、父の復員と共に、父方の里、隣町の十日町小学校に転校した。

高島小学校から南三百メートルのところに母の実家、最初の疎開先の星野家がある。従兄の結婚式や伯父・伯母の葬儀の時に訪れているので、かなり正確な記憶がある。

ストリートビューで実家の写真を撮る。

終戦の年、昭和二十年四月の初め、東京馬込まで迎えに来てくれた伯父に連れられて、やっとたどり着いた。上野駅の周りに出来た長い行列に半日以上も並んだ情景をうっすらと覚えているが、それよりも強烈だったのが春の大雪である。四月だと言うのに、実家の玄関は雪に埋もれていて、二階から出入りしていた。もっとも二階の屋根から降した雪が、家の周りに雪山を作っていたせいもあった。その頃の家は、もちろん建て替えられているが、家全体の構造は、全く変わっていないようだ。

床の間と仏壇が前方に並ぶ十二畳ほどの座敷を中心にして、左右に脇間、手前にやや低くなった十畳ほどの板の間があり、その左側に玄関が付いていた。家族の居室・寝室は右側の脇間側に並んでいて、その続きに暖炉、台所などの生活空間があった。その他に二階にも納屋の外に居室があった。何しろ十人ほどの大家族のところに、新たに母と二人の子が疎開してきたのだから満杯である。

私たちは、座敷の左脇間を割り振られた。座敷とは格子付きの障子で仕切られていて、巾の広い廊下に畳を敷きつめたような細長い部屋であった。うろ覚えに「切腹の間」と聞いたが、普通の農家なのに変な話である。そ

う言えば座敷の長押上に立派な槍が飾られていた。戊辰戦争時にも動員されたのであろうか刀剣もあった。

従兄の結婚式はこの座敷で行われた。大学に入ったばかりの頃、母と一緒に出席したが、上座には御本家の奥様が座っていた。母と小学校が同窓で、長岡の女学校を卒業してから「ご本家」に嫁入りしたが、早くして御主人を亡くし、更に農地解放に会い、ふたりのお子さんを高校に挙げることもできないほどの貧困のどん底にあった。「私の方が駆けっこも勉強もできたのに」という意識の母は、大学生になった息子を連れて、どんな想いであったろうか。

母は小学校を卒業してから、病弱の祖母に代わり、妹弟達の世話や家事の手伝いをしていたが、農閑期には名古屋の紡績工場に働きに出たという。一番嬉しかったことは、仕事が終わってから、勉強を教えてもらったことだという。「女工哀史」で知る世界とはちょっと違うようであるが、奇特な職員でも居たのであろうか。母にとっては、勉強はいつも楽しみであったようで、字も上手かったし、新聞を良く読んでいて、一般教養レベルもかなりのものであった。背伸びしていたのかも知れない。

御本家のあった場所は実家から更に南に百メートルほどにある八幡社の近くで、石垣のあるかなりのお屋敷であった。ストリートビューでその近所をうろついてみるが、すっかり変わっていて、石垣の名残も見つからない。

ついでに、高島村の南北に走る一キロメートルほどのメインストリートを探索する。

『岡南』を拾い読みすると、元禄十五年（一七〇二）一八二石、天保五年（一八三四）五二八石、明治九年一一七戸六四八人、明治三十三年一四四戸一〇五九人、昭和二十九年一〇二戸六四九人とある。幕末以来あまり人口に変動がない。

しかし戦後の農地解放により自作農時代になると、昭和二十七年頃から土地改良事業が大々的に行われ、地形に制約のないところでは、整然と短辺一一五メートル、長辺一九二メートルの区画になっている。まさかと思うが、太閤検地が一間（歩）＝六尺三寸＝一・九二メートルであったので、ちょうど六十間と百間に対応し、太閤検地の二町歩になる。近隣を調べてみたが一致する所はない。

農地整理の後、車社会に入り、周辺には立派な自動車専用道路が巡らされている。しかし居住地域の道は昔のまま残っている。ぐるぐる廻ってみるが、木立が残っていても、古い屋敷は見当たらない。見かけはモダンな大きな家が多いがどこか薄っぺらな感じがするのは、新建材で外面を飾っているからであろうか。面影を残すのは、小さな用水路と神社やお寺の境内のみである。

こんな巾の狭い用水路で水遊びをしていたのであろうか、その川幅を泳いで渡ることさえ、ちょっとした冒険だったのが懐かしい。

長岡市は終戦直前の八月一日に米空軍一二五機のB29により大空襲を受けた。原爆投下の予定地だったと聞くが、投下爆弾約千トン、死者千五百人、被災家屋一万二千戸という深夜の大空襲であった。高島村は長岡市の中心地から十キロ近く離れていたし、子供だったので何の記憶も無い。ただ、八月十一日に妹の玲子が生まれ、終戦の八月十五日には大人達が「負けたんだとさ」と言っていたのを覚えている。悲壮な感じなどなくあっけらかんとしていたような印象であった。

それからまもなく、父が満州から復員して来た。朝鮮の国境に近くにいたからであろうが、我家にとっては大幸運であった。

しかし、それまで勤務していた南洋漁業国策会社の南興水産にはもはや仕事がない。それでも退職金が支払われ、インフレの最中にあっても一息つけたようであった。

父はもともと隣村の十日町の出身で、早くに両親と死に別れて、地元の大工に弟子入して育った。二十歳頃、志を立てて上京し、大工をしながら夜学の中央工学校に通ったらしい。時折、有名な建築家ル・コルビジェとかブルーノ・タウトのことを話していた。夜学の先生、堀口捨巳に習ったらしい。超有名な建築家が夜学の先生も務めていたらしい。

父は南興水産が創業されてまもなく、昭和十三年頃、専門学校出身のような形で入社している。学歴詐称というわけでもなかったらしい。現業の経験もあり、建築全般について学んでいたので、実務的には重宝がられたのかも知れない。

そのことで思い出すのは、疎開先に父のかなり大きな本棚があった。父が出征してから東京大空襲の後に疎開したのであるから、よくぞ本棚など持ち帰ったものだと思う。

実は、五年生の頃、本棚の本を判ろうと判るまいと片っ端から読んでいた。近所に出来た貸本屋で、のらクロ漫画、少年少女本、講談本、吉川英治や江戸川乱歩、時には訳も分からず、加藤武雄の恋愛小説まで読んでいた。

本に飢えていて、なんでも良かった。本棚には、明治大正の元勲顕官の伝記『伊藤痴遊全集』があった。布張の鳥獣戯画の背表紙に、西郷南洲、木戸孝允、大久保利道、乃木希典、伊藤博文、井上馨などの名前が踊っていた。みんなその頃覚えた名前である。講談師で後に国会議員になった伊藤痴遊の著書だけに、ルビ付きの講談調なので何とか読めた。原敬、星亨などの名前は、間違いなくその全集で覚えたものである。「まんじ同人」の村上邦治さんの『千家尊福』に原敬や星亨がこぞって出てきた時、我が脳細胞が欣喜雀躍していた。

念のため、国会図書館を調べると、第六巻と第九巻にそれぞれが載っている。伊藤痴遊は本名井上仁太郎と言

い、星亨に師事し「政治講談家」として活躍していたことも知った。

それよりも、私にとって有り難かったのは、それらの蔵書に混じって、父が夜学に通っていた頃の参考書も残っていたことである。大部分が、体積や面積、重量などの計算式、あるいは構造力学の公式についての「専門書」であったが、「代数学」の本もあった。おそらく父のように独学で上級学校に進む者のために書かれた参考書だと思う。とにかく口語体で易しくやさしく書かれていたので何度も何度も読んでいる内に判ってきた。

最初に連立方程式の解き方が理解できた。いまから思えば、著者が「行列式」の概念を利用して初心者にも判るように、とにかく実用的に書いていた。だから、それを知ると、小学生には難しい鶴亀算などが簡単に解けた。中学生になってから、数学の教師がどうしてそんなに簡単に連立方程式が解けるのか不思議がっていた。

その頃、父が持っていた計算尺で遊んでいて、かけ算・割り算ができるようになっていた。そのためか、まともに「九九」を覚えず、今でも三九＝二十七はできても、九三＝二十七は心許ない。

父は、復員してから間もなく東京に働きに出た。戦後の復興期、大工仕事ならいくらでもあった。昔の大工に戻って稼ぎ、その延長で工務店を経営するようになった。吉阪隆正、丹下健三などの著名な建築家が設計した民間住宅をかなり手がけ、建築雑誌などにも良く紹介されていた。

父が東京で働きはじめ、私が三年生になる時に、隣村の十日町村（片田村）にある父の長姉の家に移り住んだ。建物は江戸末期に建てられた商家風の二階屋で、一階で雑貨屋をやり、二階の宴会場を村の集会場として使っていた。

私達は二階の納屋を応急的に改造した十畳ほどのところにそれから三年間お世話になった。父は相変わらず東京に出稼ぎに行き、ほとんど居なかった。

グーグルで場所を探すと、旧片田村の中央なのですぐ判った。長岡に通じる県道沿いで、小さな用水路と交差したところである。用水路は暗渠に変わり、その上に自動車道路が走っている。右隣にあった鉄骨建て十五メートルの火の見櫓は既にないが、場所は確認できる。

用水路の向い側には、疎開していた「東亜電機」という小さな工場があった。用水路に電線の切れ端やブリキ破片が捨てられていて、それらで小型モーターを作って遊んだ。薪を削って木琴を作ったり、軍用天幕切れで野球のグローブやミットを作ったり何でも自作する時代であった。

そこから北に百五十メートルのところに、片田富士神社がある。境内は盆踊りなどの会場で、絶好な遊び場所

であった。創建は定かでは無いが、今も残る社殿は文化元年（一八〇四）の再建で、新田義貞に付いて越後入りした里見大膳亮義益の末の里見家に由来するという。

二段になった石積の上に社がある。段の高さをストリートビューで測ると四十センほどである。そこから飛び降りるのがちょっと怖かった記憶がある。三角ベースで遊んだ境内もせいぜい二百坪に過ぎない。

昭和二十二年、四年生になった時に、十日町村にも新制中学校が発足した。しかし、校舎がない。その上、大空襲の復興のため、資材や人手は全て長岡に取られていた。紆余曲折の果てに、神社の御神木を利用することになった。とにかく、国や地域の復興のためには教育が最優先とのコンセンサスにより小学校の横に応急校舎が建設された。

かくして、隣村からも遠望できた御神木が二教室に替わった。全て、村民の労働奉仕によったと言う。御神木の切断作業を見たはずであるが、その高さや直径を具体的に記憶していない。

三年間通った十日小学校は、片田の疎開先から南に五百メートルのところにある。

『岡南』に載っている創立八十五周年（昭和三十二年）の校舎玄関は疎開当時のままである。たまたま同じ場所で撮った父の大正十一年卒業写真が手元にあるので比較すると、新しい方がむしろ一回り小さくなっている。ストリートビューで覗いてみるが、白い二階建ての校舎が見えるだけで今はその面影もない。

当時の教室は玄関口に続く教員室の隣にあった。画が抜群に上手な男の子がいたが、父親が画家と聞いた。疎開組だったようで、何時の間にか居なくなったが、もしかすると今頃、名のある画家になっているかも知れない。名前を覚えていないのが残念だ。

三年生の時の担任については、記憶が定かでは無いが、四、五年生の時の担任は、度の強い眼鏡を掛けた女性の「新保先生」だった。母の妹が嫁入りした先の親戚とか聞いたが、教室での出来事はほとんど覚えていない。

ただ、五年生の夏休みの宿題で、背伸びして書いた天体運動のレポートを全く褒めてくれなかったのに、入荷したばかりの黒塗りのピアノが、赤く見えたり、緑に見えたりする不思議さを書いた時にはとても褒めてくれた。鍵盤を覆う赤い布や花瓶のコスモスの葉花が映っていただけなのに、その観察態度を認めてくれたのである。私が理科好きになった原点がそこにあるように思っている。

その頃の楽しみは各種の地域対抗の野球大会である。朝早くからゾロゾロと選手達について、会場まで歩いていったことが何回もある。

新制中学校の野球チームを率いていたのが鷲尾という大学生兄弟であった。真宗大谷派の専福寺の息子達で、

そのユニフォーム姿は小学生達にとってはまさにヒーローであった。東京の大学に通っていたと聞いたが、近隣の村では彼らの他に大学生はいなかったかも知れない。

その専福寺には本堂の前方に、鐘楼をかねた立派な門があった。戊辰戦争の兵火によって消失した後の再建で、ストリートビューで見ると今でもそのまま残っている。

急に思い出した。その門前のあたりにコーリャンの臨時配給所があった。古志郡は米の本場で食糧難も多少改善された頃だったのに、コーリャンの配給……、母に言いつけられて貰いに行った。米軍の放出物資と聞いたが、とにかくこんなにまずい食料は始めてであった。もしかすると、旧軍の備蓄物資にコーリャンが残っていて、それが使われたのでは無いかと疑っている。

食糧難といえば、小学校では全校でタニシ採りやイナゴ採りの行事がしばしば行われた。校庭に隣接した田んぼに全校生徒が広がって害虫を捕るのである。タニシやイナゴの佃煮がいまや高級料理と聞くと懐かしい。

ある時、家から四キロほど離れた隣町の宮内町で青年団の野球の試合があり、例によってぞろぞろついて行った。そこは摂田屋という地域で街道沿いに機那サフラン酒本舗や吉野川酒造が大きな醸造所を持っていた。

ストリートビューでみるとサフラン酒本舗の屋敷は、今も立派な街道沿い二百㍍ほどの石垣に囲まれて、玄関や鏝絵（こてえ）を飾った大きな蔵は明治期の歴史的な遺産として有名とのこと。サフラン酒は薬用酒として養命酒と勢力を二分した歴史を持つという。サフランはあやめ科の多年生球根植物で、薄紫色の花のめしべが薬用に使われるという。今でも度数十四度、ボトル二千円ほどで売られている。

そこで、突然思い出した。三年生の夏だったと思う。中耳炎を病み、母につれられ、摂田屋の耳鼻科医院まで行ったことがある。モルタルを貼った洋風二階建ての医院であったが、もちろんストリートビューでは見つからない。

その摂田屋に入るちょっと手前に、信濃川に流れ込む太田川があり、堤防にやや大きな橋が架かっていた。暑い夏の日差しの中、中耳炎の熱もあってか、長い登り坂の途中で何度も立ち止まっていた。妹を背負った母はちょっと先に行って待っていてくれる。それを追いかける。それだけの記憶なのに情景が鮮やかによみがえる。

その長い登り坂がストリートビューでは何の変哲のない平坦な道に見える。母の晩年、我家にきてから、健康のために散歩に連れ出す度に、条件反射的に思い出した光景である。想えば、母と一緒に歩いたことなど、その時以外に記憶がない。

さて、摂田屋は戊辰戦争の時、長岡藩の軍事総督、河井継之助が本陣を置いたところである。総兵力は千三百

余人で、砲二十門ほか最新鋭ガトリング砲（機関銃）二門で武装した当時第一級の武力を有していた。その本陣光福寺は耳鼻科医院から東四百メートルのところにあった。

河井継之助が政府軍の軍監、土佐の二十三歳の岩村精一郎と接触したのは、慶応四年五月二日、小千谷の慈眼寺に於いてである。上位の軍監、長州の山県（有朋）や薩摩の黒田（清隆）に会えなかったのが不幸であった。岩村は河井を田舎家老と見くびり、議論が不利になると激高して追い返してしまう。河井継之助は藩主の信認を得て、恭順派を制圧したとは言え、強力な兵力を背景にして条件闘争をする心積もりであった。しかし岩村精一郎はそれを受ける地位でもなく器量も無かった。

政府軍側としては、会津征討の遅れを危惧して、司馬遼太郎の『峠』には記載がないが、尾州藩の軍監が河井継之助に接触しようとする動きも示した。しかし河井は「薩長の徒は暴慢をきわめ、わが微衷はさらに顧みられず、事ここにいたれば……」と突き進んでしまった。

五月十日に始まった榎峠の戦いと続く朝日山の戦いから長岡城の二度にわたる落城までの約三ヶ月間、両軍あわせて千名以上の戦死者を出した。「正義」を貫いた果てのことであり、河井継之助は後世高く評価されるようになるが、地元住民たちから見れば意味のない戦争を引き起こし、地域を焦土にした非情の人物として怨嗟の的となったとも伝えられている。

事実、十日町村の記録によると、村内三寺の他に民戸の半数の九十六戸が焼かれたという。戦争中には近隣で人夫徴達や米の徴用に反対する一揆も起きていて、その鎮圧のために貴重な兵力を割かねばならなかったという。

五年生の時、戊辰戦争の最初の激戦地、榎峠まで六キロメートルほどの距離を遠足に行った。その時はよく理解できなかったが、立木に弾痕跡があると聞いた記憶がある。

疎開中に、村外まで出掛けたのは、野球の対外試合の他に、村の東側に横たわる山麓の寺院の花祭りに詣でて甘茶を飲み、山裾から渓谷を遡り、金倉山（五三〇メートル）の中腹まで登った経験がある。山道には緑の葉にぶつぶつがついた樹木が茂っていた。ウルシの葉あるいはウルシにかぶれた木の葉と思っていたが、今調べるとヌルデらしい。もっともヌルデはウルシ科ウルシ属なのでウルシと言っても間違いではないようである。

山栗を採って食べた記憶もあるので、秋にも登ったらしい。まだ栗色になる前の柔らかい実で柔らかい渋を取ると甘かった。

その他にも、十日町に移ってから、最初の疎開地の高島村まで雪道をひとりで歩いたことがある。それは妹玲子が一歳半になった頃であった。高熱のため、ひき付けをおこし、子供心にも「死んでしまう、死んでしまう」と震えていた。その時、母から実家まで行って、山羊の

乳を貰ってくるように言いつけられた。千五百㍍ほどの距離であるが、その中間に人家のない村間道路が六百㍍ほどある

雪が降っていて不安であったが、とにかく玲子のためと念じながら、雪道を走った。帰り道のことは覚えていないが、そのわずか六百㍍をストリートビューで辿る。道幅二車線で、ほんの一またぎの道のりである。昔は半幅もなかったろう。

そのちょうど中間に大きな用水路「フクジ前」が流れている。「フクジ前」は発音でだけ知っていた名称で、今度調べてみて「福島江」と書く。十七世紀中頃、岡北の福島村庄屋桑原久右衛門と岡南の高山村（高島村）庄屋穂刈茂左衛門が協力して開掘した総長二十㎞の灌漑用水路で、流域によって若干差があるが、十日町近辺では幅五間、深さ五尺とある。信濃川からの取水口は榎峠の麓、遠足で訪れた浦柄である。流域千二百町歩を潤したと言う。高島村の石高が元禄から天保に掛けて三倍になったのはそのお陰であろう。

高学年になると夏に水泳を楽しんだ用水路であるが、両側が石積みで掴まり難く、しかもかなりの急流なので、しばしば流されて死者が出た。「福島江」は福島村から採った名称である。戸数がわずか百戸ほどの高島村の庄屋がこんな大事業をしていたなど信じ難いが、どうやら近隣の村々にも小作地をもっていた大庄屋だったらしい。

同級生の関係も訪ねてみた。

杉の木立に囲まれた大きな家に住む佐藤君という友達がいた。しかし該当地には杉の木立も家もない。

四歳下の妹の友達が石垣のある大きな家に住んでいた。庄屋と聞いていたが、農地改革で没落したらしく、寂れた石垣は残っているが何もない。うわさで聞いたが、その子の兄が東大を出て、東芝に就職したとか。

十日町村と片田村の境界付近に、しゃれた商家風の家があった。ちょっとませた同級の女の子がいたが、その家には座敷牢があり、中の住人の顔を薄暗いなかで見た記憶がある。いま思うと、歴史学者の喜田貞吉の風貌に似ていた。ひげぼうぼうで、眼光はするどいが、穏やかな感じであった。とても頭の良かった人だというがウツ病だったのだろうか。

さあ、かなり歩き回った。ストリートビューは順路に関係なく、勝手にどこにでも飛んで行けるのが便利である。疑問が生ずるとすぐインターネットで調べるとこもできる。実際に歩き廻って身体で感じる懐かしさには欠けたが、まあまあの「旅」であった。十歳の頃の脳細胞が久方ぶりに出番を得て、七十年後の情報を得て満足している。